

中川文雄、三田千代共編『ラテンアメリカの
人社会（ラテンアメリカン・ワールド）』東京：新
評論、1995年、324頁、2,800円

多民族で構成されるラテンアメリカ社会を考察する
とき、実に多様な視点がありうることに驚く。

本書はラテンアメリカ世界および各国の社会の成
り立ち、文化、国民性、および人種問題というテー
マをそれぞれ執筆者独自の切り口で浮き彫りにした
ものである。

三部構成となっており、まず第一部では三田がラ
テンアメリカの人と社会の成り立ちを、中川が「ラ
テンアメリカ人」共通の価値観や行動様式を、考察
している。第二部では、ペルー、アルゼンチン、ブ
エノスアイレス、メキシコ、ブラジルの文化と国民性を
社会学や心理学の立場から分析している。第三部は
ラテンアメリカ社会における人種問題や民族関係に
ついて、先住民社会と国家との関係、カリブ海諸
国やブラジルにおけるアフリカ系文化の形成過程と
アイデンティティ、およびヨーロッパ移民、ユダヤ
人移民、日本移民の歴史が論じられている。

読者はラテンアメリカの社会構造や文化価値体系
を解釈する際、今まで自分が気づけなかった新しい
視点がありうることに本書により気づくだろう。

ただ、これはいたしかたないことなのだが、執筆
者がそれぞれ自分の専門領域をベースにしているた
め、取り落とされてしまったテーマがあり、個人的
には、例えばアフロキューバ文化や各国の先住民社
会に関する踏み込んだ考察などが含まれていなかっ
たことが残念である。

(村井友子)

小林弘『ラテンアメリカの世界』京都：世界思
想社、1995年、xvi+286ページ

メキシコ中部から中米にかけてのメソアメリカ地
域は、南米の中央アンデス地域と並び、アメリカ大
陸の先スペイン期文明の中心であり、現在も先住民
の人口が多い。グアテマラの先住民女性メンチュウ
のノーベル賞受賞（1992年）や、メキシコ南部チア
パス州での農民蜂起（94年）等により、現在この地
域の先住民社会は注目を集めている。

本書では、植民地支配下でキリスト教化を強制さ
れながらも、さまざまなかたちで自己の民族的、文化
的アイデンティティを保持してきたメソアメリカの
先住民の生き方が、文化人類学や民族史を専攻する
5人の執筆者により多様な視点から分析されている。

第一章ではヨーロッパ起源の民族劇「モロとクリ
スティアノ」のアメリカ大陸におけるヴァリエーシ
ョンである「征服の踊り」について考察がなされる。
第二章では先住民の大規模な反乱である「カスタ戦
争」を軸として、メキシコのユカタン・マヤの歴史
が扱われる。第三章ではユカタン、チアパス、グア
テマラの事例をもとに、マヤ世界の祝祭儀礼が考察
される。第四章では先住民社会の中核的な社会組織
とみなされてきた「カルゴ・システム」を取り上げ、
先行研究の前提に対して批判が加えられる。第五章
ではメキシコ、ゲレロ州における雨乞いの儀礼を取
り上げ、先スペイン期との文化的連続性が言及され
る。
(石井 章)

Layton, Jorge A. ed. *Privatization amidst
poverty: contemporary challenges in Latin
American political economy*. Coral Gables:
North-South Center Press, 1995. xv+307p.

構造調整政策、民営化政策、地域統合といった、

1980年代に多くのラテンアメリカ諸国で採用された諸政策は、この地域に特有な貧困、所得分配の問題にどう答えてきたのか。本書はこの重要かつ困難なテーマに、学際的なアプローチでさまざまな観点から取り組んでいる。

本書は3部で構成される論文集の形をとっている。第1部では全般的な開発戦略に関する論文が集められ、輸入代替から輸出指向型への転換が政治経済的観点から分析されている。第2部はベネズエラ、メキシコ、チリ、アルゼンチン、ブラジルといった国別の事例研究、そして、第3部は開発と女性、地域統合など地域全体の開発に関する問題を扱っている。

執筆者は、国際機関の政策アドバイザーからNGOのスタッフといった援助政策に携わる論者が中心である。彼らによる、豊富な経験を背景とした分析には、政策の決定過程における政治的制約など、より現実的な視点がとりこまれている。なお、第3部では当研究所の山岡研究員がNAFTAに対する日本の官民の反応を分析している。

(北野浩一)

Maybury-Lewis, Bonn: *The Politics of the Possible: the Brazilian rural workers' trade union movement, 1964-1985*, Philadelphia, Temple University Press, 1994, xiv+297p.

本書は、ブラジルで軍事政権下にあっても農村での労働運動が広がっていったという、一見矛盾した事実を軍事政権のコラボラティスト的性格から説明している。

筆者によれば、ブラジルの軍事政権は農村での労働組合組織を体制のなかに取り込むことによって、農村での意識向上や紛争解決および大衆動員のために利用しようとしたが、逆に農民の指導者はこの立場を利用して労働者への弾圧をかわそうとしたのみならず、体制側の意図にかかわらず自分たちの都合のよいような結果を導き出すことに成功した。その

ようにして、独裁政治のもとでも草の根レベルの労働運動が根強く広がった。筆者がPolitics of Possibleと呼ぶのは、このような厳しい条件のもとでもわずかな可能性のすき間を探りながら創造性に長けた運動を繰り広げた過程である。

総論に当たる部分と、六つの地域の異なったケーススタディから構成されており、ケーススタディには、それぞれの地域の農村労働運動の指導者とのインタビューが採録されている。

(浜口伸明)

東洋政治学共同研究「出稼ぎ日系ブラジル人」上(論文篇「労と生活」)下(資料篇「団体と意識」)東京 明倫社 1995年 2冊(上巻 652ページ、下巻 598ページ)

1990年に日本の入国管理法が改訂された際、「定住者」というビザの項目が新設され、日系人がその入国目的にかかわらず、日本に合法的に入国できることが明示されるようになった。一方でこの改訂により、外国人の不法就労が減少したことから、ブラジルやペルーの日系人が数多く日本に出稼ぎに来たことは記憶に新しい。本書は、このような出稼ぎ日系ブラジル人の、出入国の推移、雇用実態、雇用斡旋、日本での生活の実態、労働観の違い、行政の対応、日本の民間支援団体、「出稼ぎビジネス」の発生、日系ブラジル人と日本の地域住民との摩擦の実例、家族の呼び寄せと子供の教育、ブラジルの日系集住地にとって「出稼ぎ」のもつ意味、送り出しの実態、などについての綿密な調査結果の報告である。調査は日本のみならず、ブラジルの日系人集住地でも行なわれており、その資料は、別冊に資料編として収録されている。このような労作が広く日本人に読まれることにより、本書中にも述べられているような、日系人と地域住民との摩擦が、解消されていくことを切に願うものである。

(山形辰史)